

〈研究ノート〉

ACTFL-OPIに見られた物語の叙述の分析

——より質の高い叙述を目指すために必要なもの——

齊 藤 真理子*

Analysis of Storytelling Narrations in Oral Proficiency Interviews. Achieving Better storytelling Narrations

Mariko Saito

要 旨 OPIテストで上級の必須条件の一つとなっている叙述を取り上げ、完成度の高い叙述が持つ特徴について考察した。まず、OPIテストの書き起こし資料90件を精査し、叙述の機能が表れている部分を抽出した。それらの叙述部分を内容の観点から5分類し、物語の叙述を分析対象とした。次に、26名による37発話について叙述の質を評価した。それから、それらの叙述について、結束性・情報量についての数量的な分析、談話構成についての記述的な分析を行い、叙述の質との関係を考察した。

その結果、次のような各レベルにおける叙述の特徴が指摘できた。1. 上級の上では、物語を要約して物語っているものが見られる。2. 中級の上では、文脈指示「ソ」の正用が見られ、(○)と評価されているものが多いが、複文の少ないものは(△)と評価されている。3. 中級の中では、指示語、接続表現などが不十分なため、(△)と評価された発話が多い。4. 中級の下では、接続表現が少なく、使用頻度の高い「～て」も使用できていない。

以上のようなそれぞれのレベルにおける叙述の特徴に基づき、各レベルにおける言語運用能力を伸ばすための練習の方向性を示唆した。

1. はじめに

1-1 研究の背景

Oral Proficiency Interview Test(以下 OPI テスト)は全米外国語協会(American Council on the Teaching of Foreign Languages:略称 ACTFL)による口頭面接テスト¹⁾である。OPIテストでは、決められた手法に則り被験者の興味に応じたさまざまな分野の話題を取り上げながら言語運用能力の上限と下限を探っていく。ACTFL-OPIの評価基準(以下 OPI 基準)にはそれぞれのレベルのできることの汎言語的な特徴が記載されており、資格を持ったテスターがその基準に照らし、被験者の言語運用能力を判定するのである。レベルは、初級・中級・上級・超級の4つの主要レベル、さらに、初級から上級に3つの下位レベルが設定されている。この OPI 基準には外国語教育の研究成果、外国語教育に関わる者の経験から得られた知見が反映されており、OPI テストで得

* 本学助教授 日本語教育

られた発話資料は、鎌田（1999）も指摘しているように、習得過程を意識して言語運用能力を分析するための格好の資料となるものである。

それぞれの主要レベルには、その主要レベルと見なされるために必要不可欠とされる特徴が明記されている。上級と判定されるには、「主な時制・アスペクトを使って叙述したり、描写したりできること」²⁾が必須条件の一つとしてあげられている。そのため、中・上級者を対象とする OPI テストでは、叙述、描写できるかが対話部分で、あるいはロールプレイ部分で調べられる。叙述・描写は OPI テストの中で、大切な位置を占める機能の一つなのである。

1-2 研究の目的

OPI 基準では、「叙述とは、一連の出来事や行動を論理的に、時の流れに沿って語ることからなり、上級話者は段落の長さの結束性のある談話で、少なくとも要約した形で物語る事ができる」³⁾とされている。

本稿では、各レベルの被験者の発話から、まとまった叙述の行われているものを抽出し、完成度の高い叙述が持つ特徴について考察するものである。

まず、OPI テストの書き起こし資料から、叙述の機能が現れている部分を抽出する。次にそれらの叙述の質を評価する。それから、それらの叙述が持つ特徴について数量的・記述的な分析を行い、叙述部分の質との関連について考察する。最後に、以上の分析結果から、質の高い叙述が持つ特徴をまとめ、日本語教育に還元しようとするものである。

2. 分析資料

まず、OPI テストの書き起こし資料集である KY コーパス⁴⁾の中から被験者によるまとまった叙述がなされている箇所を抽出し、56名の被験者による97種類の叙述部分を得た。なるべく叙述内容の条件を同じにするため、同種類の叙述をまとめていった。それは、一日のスケジュールを語る方が映画のストーリーを物語るよりたやすいように、扱う話題が身近なものか一般的なものかにより被験者にとっての難易度は異なるからである。そして、一日のスケジュールについての質問に答えているもの（スケジュール）、自宅までの行き方を答えているもの（道順）、仕事の進め方、料理の作り方などを説明しているもの（手順）、本や映画の内容を説明しているもの（物語）、そして、本人が日本に来た理由や現在の仕事に就いた理由を説明する一環として現れている叙述（来歴）に分類し、表1にまとめた。この中で、来歴についての叙述はそのこと自体を聞かれて発話している場合よりも、本人がある仕事に就いた理由、日本に来た理由などを説明している過程で現れている場合が多い。また、ニュースを題材にしたもので、ある事件の内容を物語っているものが3件あったが、これも本稿では、物語として分類した。

この5分類の中から、各レベルにおける発話資料が得られ、かつ、まとまった長さの談話が得られるという理由で物語についての叙述を今回の分析対象と定めた。被験者の背景はわかる限り⁵⁾表2に示した。資料をより充実させるために、OPI リサーチグループで分析している OPI テスト⁶⁾に見られた物語の叙述を加えた。A, H, I, Z がそれである。尚、KY コーパスの資料は1999年改訂前の OPI 基準に拠っているため上級は上級の上（以下「上一上」）と「上」の二つに分かれている。

表1 KY コーパスに見られた叙述

	超	上一上	上	中一上	中一中	中一下	初一上
スケジュール	4	5	4	3	8	5	2
道順	0	2	1	0	0	1	1
手順	1	2	0	4	11	4	0
物語	2	6	2	6	10	2	0
来歴	7	1	2	0	0	1	0

表2 被験者の背景

	レベル	出身地	性別		レベル	出身地	性別		レベル	出身地	性別
A	超	韓国	女	J	上	米国	男	S	中一中	台湾	?
B	超	韓国	男	K	上	韓国	女	T	中一中	豪州	女?
C	超	韓国	男	L	中一上	中国	男	U	中一中	韓国	女
D	上一上	中国	女	M	中一上	中国	女	V	中一中	韓国	?
E	上一上	中国	女	N	中一上	中国	?	W	中一中	韓国	女
F	上一上	韓国	男	O	中一上	米国	男	X	中一中	韓国	?
G	上一上	韓国	女	P	中一上	韓国	男	Y	中一下	中国	男
H	上一中	米国	男	Q	中一中	マレーシア	女	Z	中一下	台湾	男
I	上一中	米国	男	R	中一中	中国	女				

OPI リサーチグループの資料は改訂後の基準で判定しているため上級も3つに分かれており、HとIは、「上一中」と判定されている。表中のCとDの間の太線は「超」と「上一上」の、GとHの間の線は「上一上」と「上一中」の、KとLの間の線は「上」と「中一上」の、PとQの間の線は「中一上」と「中一中」の、そして、XとYの間の線は「中一中」と「中一下」の境界を示している。表2以降に示される表中の太線も同様である。

抽出した部分には、被験者がわからないことばを試験官に尋ねたり、試験官が被験者の発したわかりにくいことばを聞き返したりしている部分を含むものが8例見られた。これらの意味交渉の部分は物語自体の叙述とは異なるので数量的分析には加えていない。

同一の話題ではあるが、試験官が新たな問いかけをし、談話が続いた場合は、別の談話として記録した。例えば、表3のG1は「どんなあらすじでした」、G2は「最後はどうなるんですか」という試験官の問いかけに対する叙述である。

試験官が「かわいそうですね」のような相づち的な発話をし、ターンが変わっている部分が全体を通じて3箇所見られたが、これはターンを越えて一まとまりの談話として処理した。

3. 分析1—それぞれの発話資料の質の評価

3-1 分析方法

OPI テストは、被験者のレベルを判定するために、推定されるレベルより一つ上のレベル相当の質問（突き上げ）と、推定されるレベルで処理できるはずの質問（レベルチェック）を繰り返し課す。そして、OPI テスト全体を通じての突き上げ、レベルチェックに対する発話の出来具合のパターンから、被験者の主要レベル及び下位レベルを判定する。一つ一つの質問に対する答え方の質は、同一被験者の中でも、同一レベルと判定された被験者同士でも異なっているのである。そのため一つ一つの発話についてその質を調べる必要がある。

まず、それぞれの被験者による発話がどの程度のものであるかを以下の観点から、4段階に判定した。

1) 物語の流れがわかるか。

物語の叙述では、話の流れが明瞭に伝わるということが一番大切である。出来事の時間的な前後関係、誰がどうしたのかという基本的な物語の輪郭が明確に伝えられているか、その話をするための語彙力を有しているかなどを見る。

2) 話全体にまとまりがあるか。

OPI 基準に「段落の長さの結束性のある談話で」とあるように、どのような談話の形で叙述がなされたかも大切な観点である。同時に話の切り出し、展開、まとめという構成が明確かどうか、全体の結束性はどうかなども見る。

3) 試験官からの助け

「中一中」、「中一下」の被験者の叙述には試験官に促され、助けられて叙述を完成しているものが見られる。試験官の助けがどの程度あるのかを見る。

上記の観点から見て、十二分に物語れているものを(◎)、十分に物語れているものを(○)、何とか達成できたものを(△)、できなかったものを(×)で示した。全ての資料について判断根拠を述べることはできないが、次に例を挙げる。

3-2 結果

① 発話資料 B について

被験者 B は、「そうですね」と質問を受けたあと、「(前大統領が) 部下によって殺されたあと」と、事件の背景を説明し、「政権を握ることになる」こと、「その段階で」「反発を起こした地域」に「特殊部隊を送って」「隔離政策をとって、外からの情報も、あの、内からの情報が漏れないような形において、軍隊を送って、そこでかなりの人間が死んだっていうことになっています」と事件を語り、そして「人間を殺したという側面」をはじめ、「金銭的な蓄積」もあった、と事件の起きた理由をまとめ、「民間人が政治を握ってて、それに対するバッシングに近い」と、事件の評価をしている。切り上げとして、「何が悪い何が悪いって表現できない様々な問題が含まれているんですね。」と事件全体について述べている。

使用している抽象語彙表現の適切さ、全体の長さ、正確さから、十二分に物語れていると判断

し、(◎)とした。

② 発話資料G-1について

被験者Gは、まず、「ステノドッバイミーだったらー」と切り出し、「4人の子供が」「死体を見たいの感じで」「死体を探したらお金を払いませう」という「広告を聞いて」「一緒に探しに行つて」と話を展開し、「なんかこんなストーリーですね」と話を収束している。被験者Gはさらに、「男の子ども達の友情と」「子供から大人になるのその時代のことについての話」とこの映画のテーマに触れている。

「広告を聞く」「死体を見たいの感じ」という不正確な表現はあるものの、文脈から十分に意味が把握できるものであるし、映画のあらすじは十分に伝わると判断し、(○)とした。

③ 発話資料Qの場合

まず、「シャスペアの、一番おもしろいと思うの本は」と話題を提示し、「すごい怖いのが」と主人公を特定し、「結婚した、だんだんだん旦那さんの教育して(うん)それでもらって、だんだんだん優しくなってきました。」と話を展開し、「あれが一番おもしろいと思った」と自分の感想を述べることで話を収束している。

話の展開部分において、女が旦那さんの教育をしたのか、旦那さんに教育してもらったのか、が不明瞭になっている。このシェークスピアの作品を読んだことのある人なら流れはわかるという出来具合であるので(△)とした。

④ 発話資料Y-2の場合

まず、「んー、中国の映画です」と切り出し、「あかい、(ん)道路、(ん)かけて、(ん)」とタイトルらしきものを述べただけで、「この映画です」と収束している。この後、再度ストーリーを教えてほしいという試験官に「これが、ちょっと忘れたなー、んー2年前、見ました。」と答え、さらに何でも良いから覚えている映画はないかと言われると、「まだ日本来た、1年ですから」と述べる。さらに、中国で見た映画が良いという試験官に「んー、覚えられませんです」と発話が続き

表3 発話資料の題材と完成度

	題材	完成度		題材	完成度		題材	完成度		題材	完成度
A-1	映画	○	G-2	映画	○	O-1	映画	○	V	映画	△
A-2	映画	◎	H	映画	○	O-2	映画	○	W	映画	○
B	ニュース	◎	I-1	映画	○	P	漫画	○	X-1	ドラマ	△
C	本	○	I-2	映画	◎	Q	小説	△	X-2	ドラマ	△
D	ドラマ	○	J	映画	△	R	映画	△	X-3	映画	△
E-1	ドラマ	○	K	ニュース	△	S	映画	△	X-4	映画	○
E-2	小説	○	L	映画	△	T-1	映画	△	Y-1	ニュース	×
F	本	○	M	小説	○	T-2	本	○	Y-2	映画	×
G-1	映画	○	N-1	小説	△	U	番組	○	Z	映画	△
			N-2	小説	○						

ている。これは言語的挫折の一つであると判断し、(×)とした。

表3は、それぞれの発話資料の出来具合を評価した結果をまとめたものである。「超」では(○)と(◎)、「中一下」では(△)と(×)、というようにレベルによる違いは見られるが、それぞれの同一レベルの中でも違いがある。これらの発話の質の違いはどのような要素によるものなのだろうか。質の高い叙述を支えている要素はどのようなものなのだろうか。

4. 分析2—結束性と内容の複雑さについて

各発話の結束性を調べるために①接続表現、②指示語の異なり数を調べた。抽出した資料の発話の長さは異なっているので、内容の複雑さ、豊かさの目安として③文と節の数、④アスペクトの使用回数を調べた。

4-1 接続表現

接続表現については、接続詞及び接続助詞の働きをするものの異なり数を調べた。接続詞の働きをするもの、接続助詞の働きをするものについては、横林・下村(1988)を参考にした。接続助詞の働きをするものについては文と文とを接続しているもののみ取り上げた。そして、それぞれの異なり数を表4にまとめた。

表4を見ると、超級では、接続表現の種類が多く、「中一下」では少ない。

ここで、接続表現が少ないものが必ずしも完成度が低いと評価されていないことに気づく。発話資料を調べると、物語の内容を述べる際に、登場人物がいつどこで何をしたかを初めから語ろうとする場合と、主人公がどんなことをしたかを短くまとめて語る場合があることがわかる。資料番号に*をつけたものは、手際よく要約をして語っているものである。例えば、E-2は、「辛亥革命はご存じですか。」と試験官に尋ねたあと、「辛亥革命の前の清の時代から新中国が成立するまでの」と時代を設定し、「シロ、シカ、ハラというところの、農村のところですね、」と場所を語り、「人々の生活の変化とか」と内容をまとめ、「もーとってもおもしろい小説です。」と話を収束しているのである。全体として段落の長さや内容を持ち、聞き手にその小説の内容を伝えることに成功して

表4 接続詞と接続助詞の異なり数

	接続詞	接続助詞	計		接続詞	接続助詞	計		接続詞	接続助詞	計		接続詞	接続助詞	計									
A-1	○	4	3	7	*F	○	1	4	5	L	△	3	3	6	Q	△	1	1	2	X-1	△	1	2	3
A-2	◎	6	8	14	*G-1	○	0	3	3	M	○	3	6	9	R	△	2	7	9	X-2	△	1	2	3
B	◎	5	3	8	G-2	○	1	4	5	N-1	△	2	5	7	S	△	3	4	7	X-3	△	1	6	7
*C	○	1	4	5	*H	○	1	4	5	N-2	○	1	2	3	T-1	△	1	3	4	X-4	○	1	3	4
*D	○	2	2	4	*I-1	○	4	3	7	O-1	○	0	3	3	T-2	○	1	2	3	Y-1	×	1	0	1
*E-1	○	1	1	2	I-2	◎	6	4	10	O-2	○	0	3	3	U	○	0	4	4	Y-2	×	0	1	1
*E-2	○	0	0	0	J	△	1	2	3	P	○	1	5	6	*V	△	0	1	1	Z	△	1	0	1
					K	△	1	1	2						W	○	1	5	6					

いる。そのために接続表現を一度も使用していなくても (○) となっているのである。このように手際よくまとめた形で語っているものは、「上一中」以上に多く見られる。

接続詞の種類を調べると、多く使われていたのは、叙述の発話37例のうち、「だから」(11), 「それで」(9), 「で」(8), 「でも」(8), 「あと」(8)であった。

接続助詞で多く使われていたのは、「～て」(26), 「～けど」(19), 「～から」(11), 「～で」(11)であった。栃木(1995)は、日本人5名を対象としたインタビューの分析の中で、「～て」「～けど」が全員に使われており、「～て」の使用頻度が目立って高かったと報告している。

本研究でも「～て」は、37例のうち26例に使われており、一番多く使われている接続助詞であるが、「中一下」ではまだ使いこなせない。Y-2に一度使われているが、映画のタイトルの一部としてであり、接続助詞本来の使われ方ではない。

4-2 指示語

物語について叙述する場合、「その男」などと指し示す文脈指示の表現が話の流れを混乱させないためには必要不可欠である。使用された指示語の種類を表5にまとめた。KY コーパスは書き起こし資料のため、使用されている表現が間投詞的に使われているものか判断に苦しむ場合が被験者

表5 指示語の種類

	指示語		指示語		指示語		指示語		指示語
A-1	○ そういう3 その2 それ1	F	○ あの×1? そういう2	L	△ この1 その3	Q	△ あれ×1	X-1	△ あの×1
A-2	◎ あの1 この1 そういう6 その11 それ2 そんな1	G	○ こんな2 その1	M	○ この2 その1	R	△ この4 これ1 その1	X-2	△ あそこ×1 あの×2
B	◎ これ2 そこ2 そういう1 その1 それ1	G	○ そう1 その1 それ1	N-1	△ この1 その1	S	△ その6	X-3	△ —
C	○ そういう2	H	○ これ1 その3	N-2	○ あの×3? この1 これ1 その1	T-1	△ この1 そういう1 その1	X-4	○ あの×1 あれ×1
D	○ そういう1 その2	I-1	○ この1 こうい1	O-1	○ その4	T-2	○ そういう2	Y-1	× その1
E-1	○ —	I-2	◎ この1 そういう2 その1 そこ1	O-2	○ それ1	U	○ この1 ×2	Y-2	× この×1
E-2	○ —	J	△ —	P	○ そういう1 それ1	V	△ この1	Z	△ この1
		K	△ —			W	○ あの×2 その5 そんな1		

二人についてあったが、その2例については「？」をつけて表に記した。誤用は、「×」をつけて示した。指示語の使用回数も調べた。

その結果、以下のことが指摘できる。超級で、完成度(◎)と判断された叙述では、指示語の種類も、使用回数も多い。

「中一上」以上では、文脈指示の「その」「そういう」「それ」などがほとんどの場面で正用となっている。FとN-2に「あの」の誤用かもしれないものが見られるが、被験者F・N両者とも間投詞の「あのー」を頻発しているため、実際に誤用なのか判断に苦しむものである。

齊藤(1993)では、「中一上」と「上」の被験者による一まとまりの談話の分析をし、「中一上」では、「ソ」系の指示語の使用はほとんど見られず、「上」で文脈指示の「ソ」を正確に使っていると指摘しているが、本発話資料においては「中一上」の被験者全てに文脈指示「ソ」の正用が見られた。結束性を高めるのに不可欠な文脈指示の「ソ」が「中一上」で使えるようになってくるといふ結果は、下位レベルの「一上」はその上の主要レベルのことが半分以上できるレベルというOPI基準に、より合致しているといえる。

「中一中」に見られる誤用では、文脈指示の「ソ」を使うべきところで「ア」を使っているものが目立つ。

全体で使用されている指示語を調べると、「その」(16)、「この」(13)、「そういう」(11)の順が多い。このうち、「この」は下の方のレベルで多く使われている。

4-3 文と節の数

全体の情報量を表す客観的な数字として、それぞれの叙述を構成する文の数と節の数を調べた。話し言葉における文の認定は難しいもので、特に書き起こし資料の場合、文が切れているのか疑問の残るものが出てくる。本稿では、文の数と節の数を調べることで全体の情報量の目安とする。

文の認定は伊藤ら(1996)にならい、ある文型・文法事項を含んだ完結したまとまりと考え、途中で言いよどみ、述部が認められないものなどは文に含めていない。但し、「から」「けど」「が」などで終わる節で、その節に一つ以上の文法・文型を含む場合や、後件節で述部を述べる必要・不自然な場合は、述部が認められなくても一文とした。節には北條(1989)の複文の定義による連用修飾節、連体修飾節のみでなく、寺村(1981)の複文の分類にある引用の「と」を含む引用節も加えた。

それぞれの節の数、総節数、文数、そして一文あたりの節の数を算出し、表6にまとめた。全体を要約して述べているものには、表4同様発話資料の番号に*をつけた。

表6を見ると、「超」は節数、文数ともに多く、特に(◎)となっているものは圧倒的な情報量を思わせる。

「上一上」では、節数・文数ともに少ないものも(○)となっている。これは、指示語の部分でも述べたように物語の要点をまとめて述べている談話なので、節の数が少なくても(○)となっているのだろう。一つ一つの具体的情報を伝えているのではなく、「狐児達の運命」、「生活の変化」など上位概念を表すことばを使用しているからだと考えられる。

「中一中」レベルの発話資料Vも要約型であるが、これは(△)となっている。これは上位概念

表6 節数と文数

		連用	連体	引用	節数	文数	節数/ 文数			連用	連体	引用	節数	文数	節数/ 文数
A-1	○	8	3	0	11	2	5.5	*H	○	7	3	0	10	4	2.5
A-2	◎	25	8	8	41	11	3.7	*I-1	○	4	1	1	6	5	1.2
B	◎	12	1	0	13	5	2.6	I-2	◎	8	1	1	10	7	1.4
*C	○	7	3	1	11	3	3.7	J	△	4	0	0	4	1	4.0
*D	○	2	1	0	3	2	1.5	K	△	3	0	0	3	1	3.0
*E-1	○	1	0	2	3	3	1.0	L	△	3	0	2	5	7	0.7
*E-2	○	1	0	0	1	3	0.3	M	○	14	1	0	15	9	1.7
*F	○	5	2	1	8	2	4.0	N-1	△	8	1	0	9	11	0.8
*G-1	○	5	3	1	9	2	4.5	N-2	○	2	0	0	2	7	0.3
G-2	○	9	2	2	13	4	3.3								
		連用	連体	引用	節数	文数	節数/ 文数			連用	連体	引用	節数	文数	節数/ 文数
O-1	○	5	1	2	8	1	8.0	W	○	13	4	0	17	4	4.3
O-2	○	8	1	2	11	1	11.0	X-1	△	4	1	0	5	2	2.5
P	○	7	1	0	8	4	2.0	X-2	△	5	3	1	9	5	1.8
Q	△	2	1	1	4	3	1.3	X-3	△	10	0	1	11	7	1.6
R	△	7	0	0	7	8	0.9	X-4	○	5	2	0	7	3	2.3
S	△	10	0	0	10	2	5.0	Y-1	×	0	0	0	0	5	0.0
T-1	△	6	4	0	10	8	1.3	Y-2	×	1	0	0	1	2	0.5
T-2	○	2	0	0	2	8	0.3	Z	△	0	0	0	0	3	0.0
U	○	8	3	2	13	2	6.5								
*V	△	1	1	0	2	4	0.5								

を伝えることばをどの位巧みに操れるかが異なっているためと言えそうである。発話資料Vでは、「さいごな、次男は」、「人生を頼む人なんです」というように意味の曖昧な語彙を使っていることで、内容が明確に伝わらない。「人生」という言葉も使っているが、「人生を暮らす方の違いが描いている映画です。」と拙さの目立つ言い方になってしまっている。抽象的な語彙が使いこなせるようになって初めて上手にまとめて叙述できるようになるのではないだろうか。

「中一上」「上」の談話で、(△)となっているものについては、節の数、文の数ともに少なく、情報量が少ないためと思われるもの(J, K)と、一文あたりの節の数が少ないもの(L, N-1)がある。LとN-1の発話資料を見ると、確かに、単文が多く、稚拙な印象となっている。

Q以下の「中一中」の談話を見ると、S, T-1, X-3のように節の数が多く、情報量が多いと思われるにもかかわらず(△)となっているものがある。これは、複雑な物語を述べようとしているために、「あの、そのギャングスターは、あの、他の人、殺された、から、(ん)あの、ギャング

スター、弁護士に（ん）あの、死んだ、死んだ人の（ん）身体の、（ん）あの、どこに、あのー、持ってきたところ、（ん）教えた、（ん）教えました、（うん）」というように内容が不明瞭になってしまっていることによる。このレベルの被験者では、入り組んだ物語をわかりやすく述べるだけの言語運用能力がないのである。

「中一下」では、節はほとんど見られない。

同一被験者について、一文あたりの節の数をみると、同程度の数字が得られており、文構成のし方に各被験者の特徴があることが伺われる。

4-4 アスペクト

アスペクトの表現形式には、「～ている」のような文法的なものや「～はじめる」「ずっと」のような語彙的なものがある（工藤1995）。ここでは、それらの使用回数を調べ、表7にまとめた。

表7 アスペクト使用回数

		使用数			使用数			使用数			使用数			使用数
A-1	○	2	G-1	○	0	L	△	2	Q	△	1	X-1	△	2
A-2	◎	6	G-2	○	1	M	○	2	R	△	2	X-2	△	1
B	◎	5	H	○	3	N-1	△	3	S	△	0	X-3	△	2
C	○	2	I-1	○	0	N-2	○	0	T-1	△	1	X-4	○	2
D	○	3	I-2	◎	1	O-1	○	0	T-2	○	0	Y-1	×	0
E-1	○	2	J	△	0	O-2	○	1	U	○	1	Y-2	×	0
E-2	○	0	K	△	0	P	○	0	V	△	2	Z	△	0
F	○	0							W	○	1			

超級で、(◎) だったA-2とBは、突出して多くのアスペクトを使用していることが指摘できる。また、「中一下」では使用が見られない。けれども、「上一上」以下のレベルでは、アスペクトの使用が見られないものもある。全体の完成度とアスペクトの使用には特段の関わりは見られなかった。

増田（1997）は、初級から超級までのOPIテスト11本を対象とし、アスペクト使用数の分析を行っている。中級者では5～14回、上級者では28～34回、超級者では50回以上の使用が見られ、全体としてはレベルが上がるにつれ使用回数が増えてはいるが、「上一下」の二人の被験者では、20回と8回というように個人差がある。

アスペクトの使用自体は、本分析でもかなり個人差が認められるものである。

5. 分析3—談話構成について

談話構成の意識を見るものとして、特に談話の終結部に注目し、どのようなことが述べられているかを調査した。同種のものをまとめていくと、はっきりとした終結部のないもの（まとめなし）他に、次の6種類に分類できた。その結果を表8にまとめた。

表 8 終結部の種類

	終結部の種類		終結部の種類		終結部の種類		終結部の種類
A-1	○ 総括	H	○ 中心話題	O-1	○ 結末に集点	V	△ 中心話題
A-2	◎ 総括	I-1	○ 自分との関わり	O-2	○ 結末に集点	W	○ 総括
B	◎ 総括	I-2	◎ 自分との関わり	P	○ 結末に集点	X-1	△ 結末に集点
C	○ 総括		結末に焦点		付け足し情報	X-1	△ 総括
D	○ 自分との関わり	J	△ まとめなし	Q	△ 自分との関わり	X-3	△ 働きかけ
E-1	○ 中心話題	K	△ まとめなし	R	△ 自分との関わり	X-4	○ 働きかけ
E-2	○ 自分との関わり	L	△ 総括	S	△ 結末に集点	Y-1	× 自分との関わり
F	○ 総括	M	○ 中心話題	T-1	△ 総括	Y-2	× 総括
G-1	○ 総括	N-1	○ 総括	T-2	○ 総括	Z	△ 働きかけ
	中心話題	N-2	○ 結末に焦点	U	○ 結末に集点		
G-2	○ 自分との関わり		付け足し情報		働きかけ		

①最後に全体を括っているもの（総括）

例：A-1「そういうようなことに対して謝ったりする，そういう内容ですね。」

②自分との関わりを述べているもの（自分との関わり）

例：G-2「すごい印象に残ったんです。」

③結末に焦点を当てているもの（結末に焦点）

例：S「最後はやっぱり最後は，その主人公が勝ったです。」

④何についての物語かを述べているもの（中心話題）

例：V「この兄弟が，人生を，人生を暮らす方の違いが，描いている映画です。」

⑤試験官に働きかけることで話題を収束しているもの（働きかけ）

例：X-4「先生，が，見て下さい。」

⑥付け足し情報（付け足し）

例：N-2「えー香港はこれは，香港と中国の監督で，この物語について，映画を作りました。そして，結構人気がありました。」

この中で「付け足し」は，前に一度他の形で終結がなされてから，付け加えられている。(N-2, P)

「総括」は，一番多く，13例に見られた。その中で「そういう内容」のように「そういう」を使用したものが7例あり，「そんな」「こんな」も加えると，9例になる。3例は指示語を使っていない。

「自分との関わり」は8例，「結末に焦点」は7例，「中心話題」は5例，「働きかけ」は4例，「付け足し」は2例であった。

表7を見ると，「まとめなし」と分類されたJとKの談話は（△）となっている。

「超」の発話資料では，全て「総括」型であり，上の方のレベルでは，「総括」が目立つ。下の方の

レベルでは「働きかけ」が多い。これは、試験官に依存しながら話していることを示していると思われる。

6. まとめと日本語教育への応用

OPI テストに見られた叙述の中から、「物語」の叙述を対象とし、それぞれの叙述の質を支える要素について分析をしてきた。同じ物語の叙述でもレベルによる特徴が認められ、それぞれの課題も異なっていることが見えてきた。

6-1 OPI レベルごとに見た叙述の質

超級：接続表現、指示語、節数と文数、アスペクト全てにおいて多種のものを使いこなし、量も多い。超級では(◎)と(○)があるが、この違いは、量的な違いと言えそうである。(◎)と評価されたものは4種の分析全てで(○)より量が多い。

上級の上：同じ叙述でも内容をまとめて述べているものが多い。そのため、接続表現、指示語、節数と文数はそれほど多くなくても(○)となっている。

上級の中：「上一上」同様、内容をまとめて述べるタイプが多い。

上級：2例しかなく、双方とも簡単に叙述を終えているため、接続表現が少なく、指示語が見られず、節数・文数ともに少なく、アスペクトの使用も見られない。終結部にまとめも見られないため、中途半端な印象である。

中級の上：7例全てに文脈指示「ソ」の正用が見られる。(△)と評価されたものが2例あるが、どちらも平易な言葉で単文を使い説明しようとしているものである。一文あたりの節数の多いものが(○)と評価される傾向が見られる。

中級の中：「中一中」では、節数・文数が多くても(△)となっているものがある。指示語、接続表現など不十分なため、複雑な内容のことを物語ろうとするとわかりにくくなっている。(○)と評価されたものは、数種の接続表現を使いながら、それほど複雑でない内容を物語った場合(T-2, U), 「ソ」系の文脈指示を「ア」系に間違えて複雑な内容を物語っているけれど、一貫した間違いのために全体の流れを理解するのにそれほど支障の起きていない場合(W, X-4)であった。

中級の下：接続表現が少なく、接続助詞の「～て」も使用できていない。複文もほとんどなく、アスペクトも見られない。(×)が2例、(△)が一例であるが、(△)となっているものは、「だから」を一度だけ使い、単文を重ねて物語ったものである。

6-2 レベルごとの課題

最後にそれぞれのレベルで有効と思われる練習の方向性を考えてみよう。

超級：「超」では、簡単に話すのではなく、言葉を尽くして精一杯物語る練習がさらに言語運用能力を伸ばすためには必要であろう。

上級の上：今回の資料では、「上一上」では要約する形で叙述している例が多かった。要約することができる場合、強要されない限り、要約した形で述べるの方が自然であろう。G-1では、「子供達の友情」と「子供から大人になるのその時代のことについての話」と要約し始めた被験者

に対して試験官が「最後はどうなるのですか」と詳述することを求めたため G-2 で物語の続きについて詳述がなされている。

「上一上」では、物語を詳細に述べる練習とそれを要約する練習が有効であると思われる。

上級：ある程度の長さで物語る練習が必要である。談話構成については、中級者でも終結部を意識した話し方をしているものが多いが、その感覚のあまりないものには終結部の形式を意識した指導が有効だと思われる。

中級の上：単文を重ねて十分に物語ることはできるレベルである。一つ上のレベルを目指すためには、複文を構成して一文に情報を盛り込んでいくような練習が望まれる。

中級の中：複雑なことを物語っても混乱を起こさないような文法力の基礎固めが重要である。特に「ソ」系の文脈指示語が使えるようになるための練習をする。これ以上のレベルでは、接続表現の種類を増やすために、よく使用される接続詞、接続助詞を使う練習をしていく。

中級の下：文と文をつなぐことが最重要課題である。特に接続助詞の「～て」を使用する練習を徹底する。

7. 終わりに

齊藤（1999・2000）で叙述をするための効果的な練習について考える機会があった。直感的に感じていることを裏付ける必要性を感じたため、実際の資料の分析を行ってみたいわけである。KY コーパスを使用できたため発話資料はかなり集められたが、まだ一般化には注意を要する。今後さらに例を充実させていきたい。

今回は、結束性、情報量、談話構成に焦点を当てた分析であり、口頭で物語の叙述を行う場合に大きな影響をもたらすと思われる発音については触れてはいない。

要約をして述べる場合、上位概念を示す語彙が必要となることについて文中で述べたが、これらの語彙についても研究をし、成果をまとめ、授業に役立てられればと思う。

今回、構成については終結部についてしか報告していないが、全体の構成でもパターンが見られるものがあり、これについても今後まとめていきたい。

注

- 1) ACTFL-OPI テストは、外国語における話し言葉の熟達度を測るためのインタビュー方式によるテストである。テストの仕方、評価基準については牧野（1991）を参照されたい。
- 2) 日本語 OPI 研究会翻訳プロジェクトチーム（1999）p. 19
Swender（1999）p. 9.
- 3) 日本語 OPI 研究会翻訳プロジェクトチーム（1999）p. 111
Swender（1999）p. 101.
- 4) KY コーパスは90人分の OPI テストを文字化した資料である。90人の被験者は中国語、英語、韓国語を母語とするものそれぞれ30人ずつから成り、OPI テストの判定結果の内訳は、主要レベルに関して、それぞれ初級 5 人、中級10人、上級10人、超級 5 人となっている。
- 5) KY コーパスでは被験者の出身、性別が書き起こし資料の内容からしかわからないため、それらの条件が判明しない被験者もいる。

- 6) OPI リサーチグループによる書き起こし資料は、約40本のテープを聞いた上で典型的と思われるものを選んだ初級1人、中級4人、上級7人、超級3人、母語話者2人のものである。

参 考 文 献

- 伊藤とく美他 1996「日本語中級話者における発話分析—ACTFL-OPI 基準の具体化を求めて—」JALT 日本語教育論集 第1号
- 鎌田 修 1999「KY コーパスと第二言語としての日本語の習得研究」『第2言語としての日本語の習得に関する総合研究』平成8年度～平成10年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 工藤真由美 1995『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 齊藤真理子 2000「ニュースや物語を伝える」『日本語ジャーナル』2000年9月号
- 齊藤真理子 1999「詳しく説明しよう1—時の流れ—」『日本語ジャーナル』1999年7月号
- 齊藤真理子 1993「The Oral Proficiency Interview に表れた談話の分析—中級と上級の談話の型の違いについて—」『文化女子大学紀要 人文社会科学研究』創刊号
- 寺村秀夫 1981『日本語の文法（下）』国立国語研究所
- 栃木由香 1995「日本語中級学習者の話しことばのテキストの型—接続表現の使用を中心に—」『筑波大学留学生センター 日本語教育論集』第10号
- 日本語 OPI 研究会翻訳プロジェクトチーム 1999『日本語改訂版 ACTFL-OPI 試験官養成用マニュアル』アルク出版
- 北條淳子 1989「複文文型」『談話の研究と教育Ⅱ』国立国語研究所
- 牧野成一 1991「ACTFL の外国語能力基準及びそれに基づく会話能力テストの理念と問題」『世界の日本語教育』1号 国際交流基金日本語国際センター
- 増田眞佐子 1997 1997年9月27日日本語 OPI リサーチグループ発表資料
- 横林宙世・下村彰子 1988『外国人のための日本語 例文問題シリーズ6. 接続の表現』荒竹出版
- E. Swender (Ed.) 1999 ACTFL Oral Proficiency Interview Tester Training Manual. Yonkers, NY: The American Council on the Teaching of Foreign Languages.